福沢諭吉の描いた「日本国の将来像」の変遷

――日本とアジア情勢の認識から――

易　素　玫

一　はじめに

日本の近代思想家の中で、最大の啓蒙思想家と称されている福沢諭吉は、日本の「一国独立」の理想を描くなかで、イギリスをそのモデルとしたことが知られている。しかし、その具体像においては、けっして不変のものではなく、特に、日本をとりまく国際関係の変化、諭吉の中国・朝鮮に対する認識の変化と対応しつつ変遷している。それは国内情勢を中心に導き出された従来の〝福沢における思想の転回〟の評価とは異なる面をも示しているようである。

本稿では、諭吉の生涯に沿って、彼が描いた日本国の将来像の変遷をたどり、その背後にあるものを考えてみたい。

二　福沢諭吉の英国観

諭吉が、なぜイギリスを日本国の将来のモデルにしたかということを明らかにするまえに、まず、彼の英国観から考察してみるべきであろう。ここでは、諭吉の英国観とその評価について、まとめてみよう。

一八六二（文久二）年、遣欧使節の一員として出発する前の諭吉のイギリスに対する認識は、次のようなものであった。

第一、英語は世界で最も通用する言語であること。第二、イギリスはしばしば江戸幕府に抗議し、脅迫したこと。第三、イギリスは自由貿易を主張している国であること。

この時期における諭吉の英国観の特質は、第一点と第三点にあると思う。イギリスの外交官オールコックが傲慢な

態度で江戸幕府を責めたように、日英両国の外交関係は、必ずしも対等なものではなかったのに、諭吉はそうは考えなかったらしい。なぜ諭吉はそう考えなかったのか、それは諭吉が蘭学から得た西洋知識の限界であり、万国公法を知らなかったことによるものだと考えられる。

一八六二年、諭吉は、二回目の外遊のチャンスに恵まれて、遣欧使節に随従し、イギリス軍艦に乗って、ヨーロッパへ赴いた。これが、諭吉が当時のイギリスを将来の日本のモデルとみなし、イギリスに倣い、イギリスと競争したいという発想を持つに至った契機であったと思われる。諭吉は、ヨーロッパへ行くまえに、すでにイギリス文明に関心を持っていたらしい。この時期の諭吉は、西洋の学問に心酔し、楽観的かつ積極的に、西洋と接触したかったのであろう。一八七一（明治四）年までの諭吉の著作の傾向により、それを明らかにすることができる。

まず、諭吉のイギリスに対する評価からみてみよう。

（前略）凡そ少年を教育するに金を費すことの多きは世界第一と云ふ可し。（中略）近來は又貧賤の子を教育して國の文明を十分にせんとて益々學校を設け、中に就て日曜學校と唱ふるものあり。（中略）學校にて人を教育するのは、普魯士、荷蘭の諸國に一等を譲ると云ふものもあれども、其實に然るや否は知る可らず。但し英人の學校工作の諸科に於て他國人に超越する所以は、教育の行届たるに非らず、唯其國律寛裕にして人を束縛せず、人々をして其天禀の才力を伸べしむるに由て然るなり。（『西洋事情』初編、慶応二年出版、『福澤諭吉全集』第一巻三七二ー三頁、以下『全集』一・三七二ー三のように示す。岩波書店、昭和四十四年再版本より。傍点筆者、以下同じ）

右のように、諭吉は英国の教育を評価し、「學術工作」は世界一と認め、人間の才能を伸ばす制度の良さを認めている。また、英国の富強と海外植民地の存在とはあまり関係があるとは認識していない。むしろ自由貿易の効果が高く評価され、現状では、植民地はむしろ本国の負担になっている、と諭吉は考えたらしい。『西洋事情』初編に述べられたイギリスと海外植民地との関係は次のごとくである。

第一に、イギリスは海外の領土を保護するために多くの軍艦を送り軍隊を備え、その費用を本国から出しているが、植民地の人民はこれを知らないこと。第二に、東インドとの貿易利益は大きいが、北アフリカ及び西インドの植民地からの税金などは、本国の費用にしたことはないこと。第三に、植民地との貿易利益は必ずしも外国との貿易利益より良いとは限らないこと。第四に、マルタ島はイギリスの緊要の領地であること。（『全集』一・三七九ー八〇）

また、諭吉は、「凡そ他人と貿易するに於て、天然の理に從ひ雙方の利益となるに非ざれば、其本國の為め筋と云

ふ可らず。若し天然の理に從て雙方の利を謀るときは、所領の地をして獨立國とならしめば其利益愈〻大なるべし。」（『全集』一・三七九ー八〇）と述べている。彼は国と国とは対等な関係で自由貿易を行うことを理想としたらしい。さらに、植民地政策に甘い考えを持っていた彼は、なぜイギリスが世界一の富強国になったのか、という問題を検討した。その回答は、イギリスの富強は、地理上の便利、産物の豊富さ、人材の多さ（即ち教育普及の結果）及び政治の公正さの四つの「要素」を備え、これを巧みに運用していたということであった。（『全集』一・三八〇）

この時期の諭吉は、日本が先進国との間で自由貿易を進めれば進めるほど、日本はますます先進国に従属しなければならない、という危機を見逃しているといってもよい。これは、蘭学者から英学者へ転向した諭吉が、なお西洋の学問、とくに社会科学については初心者にすぎなかったのであるから無理からぬところであるともいえよう。諭吉が経済学を勉強しはじめたのは、一八六七（慶応三）年の第二回アメリカ行きの際、ウェーランドの経済書を購入し携え帰り、翌年、上野での彰義隊の戦いのさなかにも同書の講義を行ったというエピソードが残る時期であった。諭吉のイギリスの植民地政策に対する認識も、彼の身につけた洋学知識の限界を示しているようである。

一八六二（文久二）年から一八六六（慶応二）年までの諭吉の英国観は、彼の基本的な英国観となった。ここで注目しておきたいのは、イギリスの富強にはいくつかの「要素」があるという前述の認識である。地理上の便利と物産の豊富さは、自然の条件である。日本は幸いにこの二つの要素を有している。人材の多さと政治の公正さは自然の条件のように不変性をもつのでない限り、改革することによって、これを得るのは、決して不可能ではない、と諭吉は考えたらしい。このような認識の上で、現在ヨーロッパが和平を得たのは、イギリスが貿易の法を寛大にした後のことだ[1]、と主張したのである。

諭吉のイギリスに対する評価には、「荷蘭に於ては人を用るに其宗門を問ふことなし。英国にては然らず。国事を議する官吏は必ず『プロテスタント宗』の人に限る。」（『全集』一・三四九）と、また、「抑も文明開化と唱る英國にても、其教化末だ洽しと云ふ可らず。文字の教育を受けずして無學文盲なる者あり、放蕩無頼を犯す者あり、又其邊鄙の地に至ては上古懶惰の風に安じて文明の味を知ざる者あり。然れども是等は皆文明世界中の野人なれば、遂には他の風に靡き他の徳に化して、共に天地の歡樂を享るの日ある可し。」（『西洋事情』外編、慶応三年出版、『全集』一・三九七）と述べているように、イギリスの持つ弊害についての紹介もあった。しかし、諭吉はこれを軽くみていたらしい。諭吉は、ただたんにイギリスが世界一の富

強国であることのみを見て、イギリスをモデルにし、日本国の将来像を描いたのではない、と思う。彼が、イギリスの法律制度及び自由貿易政策を讃美しているように、これらの制度、政策（「要素」）を日本へ移植することによって、日本もいつか文明國になることができるであろう、と考えていたのだろう。諭吉が、「西洋學と申は、砲術器械術航海術抔業前の事を指すにあらず、學と術とは自から分別に有之事に御座候。混合すべからず。」（慶応二年二月六日の島津祐太郎宛書翰、『全集』十七・三八）と述べているように、洋学学習の必要性を強調しながら、武器、船艦などの「術」の輸入よりも、「文學」（学問の総称）を先に輸入することを考えていたということを見逃してはなるまい。それは、洋学者を志した諭吉が、改革すべき人材という一要素を得るべく、洋学人材の養成を急務とし、書籍の輸入の方が砲術よりも大事なことだ、という認識があったからであるともいえる。

ところで、諭吉は、ヨーロッパの島国・イギリスを東アジアの島国・日本の将来像として、時勢に注目しながら、日本の将来を考えていたと思われる。次は、諭吉の描いた日本国の将来像を中心に述べたい。

三　日本国の将来像（第一期）
―独立国・文明国へ―

前述したように、諭吉は、当時のイギリスをモデルにし、日本国の将来像を描いている。しかし、前述の「要素」以上に、日本はいったいどのように発展すれば、イギリスのような富強国になれるか、という具体的な方法を、諭吉がはっきり示したのは、おそらく一八八一（明治十四）年の『時事小言』の中で「内安外競」という原理を提出し、それをもとに展開した彼の「東洋政略」であっただろう。諭吉の描いた日本国の将来像を年表風に示せば、次頁の表のようになる。

第一期における諭吉の描いた日本国の将来像は、たんに「独立した文明国を造ろう」というものであった。しかも独立国・文明国への道は、急速に軍備を充実・拡張するよりも、洋学を普及させて、西洋の文明を導入し、人心の変化による日本国の「始造」と独立をめざす「一身独立して一国独立」という道である。ここから進めて、東に日本、西にイギリスと相対してひけを取らない国にしたいという願いこそ、諭吉の描いた日本国の最高の目標であった。(2)

独立国・文明国をめざすことが、一八七八（明治十一）年までの諭吉の描いていた日本国の将来像であったといえよう。とくに注目したいのは、文明国が必ずしも現在の西

時期	年(年号明治)	日本国の将来像	代表的文献 (年・月)
第一期 (1858－1878)	四年まで	独立できる国を造ろう。	「中津留別之書」(三・十一)
	五年から十一年まで	独立国→東洋の一新文明国→貿易商売の国→英国に遅れないよう。	『学問のすゝめ』初編(四) 『文明論之概略』(八・四) 「教育説」(九・十二) 『通俗国権論』(十一・九)
第二期 (1878－1885)	十四年	東洋の文明の魁→アジアに日本、ヨーロッパにイギリス	『時事小言』(十四・九)
	十五年	東洋の文明の魁→東洋の一強国→東洋の一新英国	「東洋の政略果して如何せん」(十五・十二)
	十六年	東洋の文明の魁→東洋の一新西洋国	「外交論」(十六・十)
	十七年	東洋の一新西洋国→欧洲列強の東洋の友好国(入欧へ)	「東洋の波蘭」(十七・十)
	十八年	日本は脱亜すべし	「脱亜論」(十八・三)
第三期 (1885－1900)	三十年	世界の一強国→もっと強富国へ	「対外前途の困難」(三〇・六) 「大に外資を入る可し」(三十一・一)
	三十一年	東洋の英国になれるように発展すべし	「海軍拡張の必要」(三十一・二)

洋国に限らないという認識[3]があることである。諭吉は、日本がいまだ「半開の国」と認めた上で、「日本の文明は西洋の文明よりも後れたるものと云はざるを得ず。文明に前後あれば前なる者は後なる者を制し、後なる者は前なる者に制せらるゝ理なり。」(『文明論之概略』、『全集』四・一八三)という認識を抱いていた。ところが、日本の文明は、支那や朝鮮の文明よりすこし進んでいるという認識をも抱いていた。そして、当時なお「独立」＝学問・商売・国財・兵備などの立国の要素＝していない半開の国・日本の、欧米の文明国・先進国に対するコン

プレックスは、却って同じ「半開の国」である支那・朝鮮に対する優越感となった。

事実、そのような認識によって、明治政府は、条約改正のために岩倉使節団を欧米へ派遣した同じ年、即ち一八七一（明治四）年の五月ごろ、著しい不平等条約の内容を備えていた草案で、清国との修好通商条約の調印を試みたと思われる。[4] この時期に入って、明治政府はすでに「脱亜」への道を踏み出しはじめたのである。とくに、中国を中心とした旧国際秩序を破壊しようとする動きをとろうとしたことを見逃してはなるまい。それは、台湾、琉球及び朝鮮の三か所をめぐって日清両国が葛藤を生じる主因であったろう。

一方、諭吉は、当時の明治政府のように、武力をもって、中国・韓国を苦しめるというアジアに対する強硬な態度をとることに賛成することができなかった。それは、諭吉が平和的に近隣の中国・韓国との交際を行うべきことを唱えたからではなく、日本と近隣諸国との外交関係を度外視したからである。当時、「貧弱国」だった日本にとって、最大の敵とは、「武力」ではなく、西洋諸国の貿易政策であった。諭吉が、外戦によって日本の国力を弱め、却って西洋諸国の国力を強めることになるというような愚政に賛成するはずはなかった。

一八七一（明治四）年出版された『学問のすゝめ』初編で、諭吉は、依然として、「一身獨立して一家獨立し、一家獨立して一國獨立し、一國獨立して天下も獨立すべし。」という理想を掲げた。しかし、一八七三年に入ってからは外債のために、日本国は債権国に利息を払わなければならないことを知り、外国と内国との別があるように、債権国へ利息を払うのは「自國の不便利となす」という認識によって、「一國獨立して天下も獨立すべし」という高尚な理想を棄てることになったと思う。諭吉にとっては、アジアの中には「敵國外患」といえる国はないので、アジア諸国を度外視してもよいと考えたのであろう。『文明論之概略』では次のように述べている。

> 人或は云はん、人類の約束は唯自國の獨立のみを以て目的と爲す可らず、（中略）目下日本の景況を察すれば益事の急なるを覺へ又他を顧るに遑あらず。先づ日本の國と日本の人民とを存してこそ、然る後に爰に文明の事をも語る可けれ。國なく人なければ之を我日本の文明と云ふ可らず。（『全集』四・二〇八）

このように、諭吉は、第一期における独立国・文明国へという理想から、以下に述べるような東洋の盟主国へ進むべしという第二期の日本国の発展を期待するようになったのである。

四　日本国の将来像（第二期）
―東洋の盟主国へ―

独立國・文明國をめざすことが、第一期における諭吉の描いた日本國の将来像であった。しかし、当時の日本の状況から見れば、主観的条件＝国内の条件の不十分さ（諭吉は、前述の学問・商売・国財・兵備の四項目を一国の独立の要素とみなすと、いまのところ、日本は一つも欧米諸国に優るものはないといってよい、即ち国内レベルの文明化は、なお国際レベル＝欧米諸国の文明水準に達していないと認識している。）及び客観的条件＝西洋諸国との対等な外交関係とが不十分であるという点から、独立国・文明国へという新日本の建設が、一八七八（明治十一）年頃すでに完成したとは考えられない。むしろ、西洋人は、たんに日本を一つの貿易相手国として、日本人と交わっていた。日本は、「独立国」の名を得たにもかかわらず、実際は、文明国（先進国）の外交官の高圧的な態度を堪え忍んでいた。このような背景の下に、諭吉が、まだ新西洋国を造ろうという日本国の将来像を描かなかったのは、いまだに「貧病国」である日本が、現実に西洋国になれる主観的条件及び客観的条件を備えていないと認識していたからであろう。一八七八年頃の日本にとって、「入欧」への道は、とても危険であったのではあるまいか。

それは、おそらく当時の諭吉の重大関心事であったろう。それに関する資料としては、次のようなものがある。

ⓐ　明治二年（？）六月十九日の築紀平宛書翰（『全集』十七・七七）

外國人は日本ぇ對し人民あるを知て政府あるを知らず、唯日本國人と自由貿易を欲するのみ。

ⓑ　明治八年九月八日の高木三郎宛書翰（『全集』十七・一八七―八）

在留の外國人は不行状、醜聞聞くに不堪、ミニストル其外の官吏は唯日本に對して威張るのみ。（中略）外國人は日本の成生を待たずして青喰にする積歟。金の玉子を生む鵞鳥を殺すとは此事なるべし。

ⓒ　明治九年七月八日の富田鐵之助宛書翰（『全集』十七・一九五）

貧病國の愚政府役人の爲にはよき遊興なれども、人民の爲にはハイタキシスなり。各國の博覧會も實に日本の爲に貧乏神なり。

いったい「貧病國」の日本の独立の道はどこにあるのか。諭吉の考えによれば、貧国から富国へ転換しうる道は、ただ学術及び商売の二ケ条のみであった。ところで、独立の「強国」を造りたいという希望は、一八七九（明治十二）年の琉球処分を契機にして、形成されたようである。というのは、一八七七（明治一〇）年頃書かれた「教育説」に

は、日本の独立を維持しようとすれば、貿易商売の国となって始めて、国を守ることができる、という説がみられるからである。

（前略）目今の有様を察し、推して今後の成行を量りて、僅に他日独立の望を屬す可きものは、唯學術と商賣との二箇條のみ。今日我國の學術、決して獨立したるものに非ず。彼に學び彼に依賴して尚足らざるものゝ如く（中略）方今天下の事務多端なりと雖ども、就中國命の關する所の大本は唯貿易の一箇條にして、外國の貿易と自國の動工と平均を得れば日本は獨立するを得る可し。若し然らざれば滅亡に屬すること必せり。概して云へば、日本は武力の國にも非ず、又交際の國にも非ず、唯貿易商賣の國と為て始て存す可きものゝみ。（『福澤文集』に収録されている。明治十一年一月発兒。『全集』四・四三五）

右の資料より諭吉には、この時点ではまだ日本が軍事的強国へ発展すべきだという考えが生じていないことを明らかにしうる。そして、一八七八（明治十一）年の『通俗国権論』で、はじめて、「外戦止むを得ざる事」を唱えたのである。小国の独立を維持することは、いかに難しいことか、と諭吉は主張した。そして、国と国との関係においては、ひたすら兵力の強弱の一点に依頼するのみであると考えるに至った。しかし、小国・日本は、西洋の強国を敵にして、彼らを敗る自信はなかった。[5] 諭吉が、国権論者へ転向したのは、琉球処分断行という時代的背景の下に、はじめて、日本と近隣諸国との関係に関心を持つに至ったからなのである。諭吉は一八七九（明治十二）年の夏頃、『民情一新』を書いているとき、はじめて近時の文明において、後進国日本と先進国との技術差が三十年位しかない、ということを発見した。『民情一新』は、諭吉が自ら誇った作品であった。[6] 諭吉は、この作品を書くと共に、日本も先進国へ転換しうる主観的条件及び客観的条件を備えている、と思った。主観的条件とは、日本の上流の士人に、近時の文明の思想が存在するということ、客観的条件とは、近隣の中国と彼の「下国」＝属国の関係を破壊すれば、国権を拡げることができるであろうということである。一八七九年頃、諭吉が、中国を征服しようという大志を抱くに至ったのも、琉球処分断行の効果を認めたからであったろう。諭吉が中国を征服しようという大志を示した資料を抄録しておこう。

「通俗國権論」の成つたのは明治十一年である。次いで同十四年に著はされた「時事小言」に於ては、更に進んで西方東侵の形勢より支那朝鮮に対する方策を述べられてゐるが、先生はたゞ著書の上にこれを論ぜられたばかりでなく、東洋政略の著手に就ては和戦共に支那の國情を研究するため其國語を學ぶ者を養成するの必要を認

められ、率先慶應義塾に支那人を招聘して支那語の學習を開始したのは、明治十二年のことであった。（中略）先生は十二三年頃社友との茶話小集にもよく支那經略論を談ぜられ、席上左の如き一詩を即吟し社友と酬和せられたこともあった。

揚子江流鬱有レ鞭　依三糧於敵一不須レ錢
扶桑回レ首三千里　日出天連三日没天一

これに對する中上川彦次郎の次韻に

重歩三高韻一奉レ酬三福澤大叔一
驅レ馬須レ鳴琅琅鞭　乘レ車宜レ駕鐵連錢
古来將相元無レ種　富貴誰言似レ上レ天

といふのがある。先生は「支那が手に入ったら其總督には彦さんが適任であらう。」（石河幹明『福澤諭吉傳』第三巻六八三、四頁、岩波書店）

諭吉は、日本の領空が中国の領空につながるという夢をみていたのだろう。その後、もし諭吉が、朝鮮の開化派金玉均及びその関係者と交際しなかったら、一八八一（明治四）年の『時事小言』で示された東洋政略というものは成立しなかったと思う。諭吉にとって、それまでは、アジアの問題は、あくまでも中国の問題にすぎなかった。

ところで、金玉均を通じて、諭吉の名を朝鮮に輝かすことになったことは、諭吉にとって、どういう意味を持つのであろうか。それと、諭吉の東洋政略はどのように結びついていたのか。簡単にいえば、思いもかけず、近隣中国と彼の「下国」の関係を破壊しうる時機がすでに到来しているという認識、即ち、金玉均の力を借りて、朝鮮における日本の勢力を拡張しようということを狙ったにほかならない。一方、金玉均も、諭吉の影響力を通じて、日本から経済的援助、革新事業の助成などを求めたのである。諭吉の東洋政略の成否のカギは、金玉均一身にあったともいえる。日本国の将来も、将来の金玉均政権との友好関係と密接にかかわっている。それゆえ、まだ独立国・文明国とは認識していなかった日本が、俄に、「東洋の文明の魁」となり、東アジアの平和を保護すべき任務を担うようになった。そして、一八八一年頃から、諭吉は、金玉均政権を成立させようという志を抱き、さらに日本が朝鮮における指導権を得るためには、朝鮮の「上国」＝宗主国中国との争いを免れないという覚悟をしたのである。しかし、中国は強敵という認識があるので、彼の朝鮮政策を実現しうる時機はなかなか訪ずれなかった。

諭吉は、常に国内・国外の形勢に注目しながら、日本の建設方針＝日本国の将来像を修正していたらしい。そして、一八八一（明治十四）年から一八八五（明治十八）年までに、諭吉の描いた日本国の将来像としては、「東洋一新文明国」を造ろうという目標から、「東洋一新英国」→「東洋一新西洋国」→「欧洲列強の東洋の友好国」という段階

を経て、「脱亜入欧」と変化していく。[7]

ところで、朝鮮における中国の勢力は確かに強かった。中国の存在は、絶えず諭吉の「東洋政略」という考えを妨げた。諭吉が、日本は、「東洋の文明の魁」として、西洋と対抗するか、あるいは、自国の利益を守り、支那・朝鮮を見棄てて、「脱亜」へいくのか、という二者択一の難局に直面したのは、おそらく一八八三、四（明治十六、七）年頃であったろう。諭吉は、結局日本国を守る以上、脱亜の道を歩むしか道はないと覚悟したと思われる。

諭吉にとって、その「東洋政略」という考えを実現する成否のカギは、金玉均政権が成立できるか否かにあった。しかし、一八八四年十二月頃、甲申政変の不成功によって、彼の東洋政略という考えを実現する好機は消えてしまった。そして、「脱亜論」へ向うことになる。「脱亜論」におけるアジアとは、抽象的アジアにすぎないと思う。即ち文化面においては、中国、朝鮮及び日本の国内の保守頑陋派を指し、外交面においては、たんに朝鮮の開化派一党を指すのではないか、と思う。現実において、諭吉の一八七九（明治十二）年頃からの中国に対する態度から評価すれば、諭吉は中国の対琉球、対朝鮮及び対安南の宗主権を否定するのに懸命であったのではあるまいか。その東洋政略は、ひたすら中国を「犠牲」にして、日本国の真実の独立を確保することを謀ったものであった。

五　「脱亜」後（第三期）
―世界の一強国へ―

「脱亜」した諭吉は、本格的に「東洋一新西洋国」を造ろうという考えを実現するために、あらゆる方法で努力していった。この希望は、ようやく一八九五（明治二十八）年の日清戦争の勝利によって、実現するに至る。しかし、実現したのは、たんに日本国は独立した文明国であるという地位を得たのみであった。いまだ日本国は「新西洋国」になりうる主観的条件（即ち国内レベルの文明化はまだ西洋国の文明水準に達していないということを指す。）及び客観的条件（即ち西洋人の東洋蔑視という観念を根絶しがたいということを指す。）をまだ備えていなかった、ともいえよう。そして、日本は、世界の列強の列に入り、さらに、「東洋一の強国」から「世界の一強国」へ転換しようという目標に向かって発展していく、というような将来像が諭吉によって描かれることになる。[8]

むすびにかえて

富国強兵を最大課題とした諭吉が、後進国日本が先進国イギリスをモデルにおいたという見方は、筆者の独自の見方でなく、福沢研究において、すでに定説のように研究者

らに認められているともいえよう。例えば、初瀬龍平氏の「『脱亜論』再考」という論文には、「福沢がイギリスを近代化のモデルにおき」と書かれている。その根拠とする資料としては、「英吉利の風に効ひ、東洋新に一大英國を出現して、世界萬國と富強の鋒を争ひ」（『時事小言』、『選集』五・一九〇）、「絶遠の東洋に一新文明國を開き、東に日本、西に英國と、相對して」（『福翁自傳』、『選集』一〇・三三二）などをあげている。諭吉が終始一貫してイギリスを日本國の将来像のモデルにしたことは疑うべきもないと思う。しかし、筆者は、諭吉の思想が一生変化がなかったとは考えず、ある程度変化していったという仮説にもとづいて、彼の描いた日本国の将来像の変遷を追求し、東アジアの國際情勢の変化のなかで、朝鮮・中国に対する考え方の変化を契機に、諭吉の日本国の将来像が変化していったことを明らかにした。先学の皆様の御教示をお願いして、つたない小稿のむすびにかえさせていただきます。

〔注〕

(1) 『西洋事情』外編（慶応三年季冬出版、『全集』一・四一四）に英国の主張した「自由貿易」についての評価がある。

(2) 『福翁自傳』（明治三十一年発表、『全集』七・二五九の三行目から十二行目までを参照されたい。）

(3) 『通俗國権論』（明治十一年九月刊、『全集』四・六二四）

(4) 『日本外交史』2「条約改正問題」（鹿島守之助著、鹿島研究所出版会発行、一九七〇年初版）の二八二の四行目から九行目まで）

(5) 『通俗國権論』には、外戦の用について、次のように述べられている。（『全集』四・六四三）

一、二勝敗の損失を以て全國人民の報國心を振起し、百年の利益に見込あれば其損失は憂るに足らざるなり、云云。

(6) 『全集』五・六四三

(7) これに関する資料としては、次のようなものがある。

ⓐ 明治十四年九月の『時事小言』（『全集』五・一七九の十五行目から十六行目まで、及び一八六の十二行目から十五行目）

ⓑ 明治十五年十二月の「東洋の政略果して如何せん」（『全集』八・四三七の九行目から十一行目まで）

ⓒ 明治十六年十月の「外交論」（『全集』九・一九六の十一行目から十五行目まで）

ⓓ 明治十七年十月の「東洋の波蘭」（『全集』十・七八の十二行目から十四行目まで）

ⓔ 明治十八年三月の「脱亜論」（『全集』十・二四〇の一行目から四行目まで、及び十一行目から十四

行目まで）

これに関する資料としては、次のようなものがある。

ⓐ 明治三十年六月の「対外前途の困難」（『全集』十六・二三の五行目から六行目まで、及び二五の四行目の最後から六行目まで）

ⓑ 明治三十年七月の「西洋書生油斷す可らず」（『全集』十六・五一の十二行目から十七行目まで、及び五二の十六行目から十七行目まで）

ⓒ 明治三十一年一月の「大に外資を入る可し」（『全集』十六・二〇四）

ⓓ 明治三十一年二月の「海軍擴張の必要」（『全集』十六・二六五の九行目から十一行まで、及び二六六の一行目から四行目まで）

〔付記〕 この小論は一九八七年一月広島大学大学院地域研究研究科に提出した修士論文「福沢諭吉の中国観」の一部である。

（一七頁より続く）

佐野 由美子「芸備地方における俳諧の伝播――竹原・三原地方の様相――」

島田 智子「芥川龍之助の文体について――その『語り』についての研究――」

生田 尚子「大長宇津神社祓戸講の研究」

竹中 淑恵「厳島の雅楽」

薙野 孝文「黄表紙の研究――音通による言語遊戯の考察――」

新田 千絵「日本水泳史の一考察――近世・近代の水泳教育を中心として――」

堀川 道代「川端康成の文体について――『名詞＋である』の用法を中心として――」

安河内 朱美「湖白庵諸九尼研究」

Ⅱ 修士論文題目

〔一九八五年度〕

楊 剛「古事記の用字法の研究」

林 雪星「有好佐和子作品研究――女性像を中心にして――」

Mabrouka Zaroui「日仏両国語の表現に関する比較研究」

（四三頁へ続く）